

志向的意識と場所的意識

満 原 健

序

西田の論文「場所」は以下のような記述で始まる。「現今の認識論に於て、対象、内容、作用の三つのものが区別せられ、それ等の關係が論ぜられるのであるが、かかる区別の根底には、唯時間的に移行行く認識作用と之を超越する対象との対立のみが考えられて居ると思う」(三・四一五)①。対象、内容、作用の三つの概念の区別はブレンターノの思想に由来する。ブレンターノは『経験的立場からの心理学』で、物的現象と異なる心的現象の特徴を、志向的内在、つまり常に何らかの対象あるいは内容へ方向づけられ關係をもっていることに見出し、このような特徴をもつ心的現象を作用と呼んだ。このブレンターノの哲学ではまだ対象と内容という二つの概念は区別されていなかったが、志向的内在というブレンターノの発想を受け継いだトウルドウスキによってその二つの概念の違いが主張され、そこではじめて対象、内容、作用という三つの概念が明確に区別されることとなる。そしてフッサールもまた、志向的内在というブレンターノの思想に決定的な重要性を見出し、対象と内容、作用などの概念を駆使して哲学を展開させていった。西田の言う「対象、内容、作用の三つのものが区別」された「現今の認識論」とは、ブレンターノの後継者であるトウルドウスキやフッサール、またその影響を受けた認識論を指すと考えられる。

そこに共通した基本的な特徴は、何かへと向かい関係するのが心的現象あるいは意識の特性だと考える点にある。言い換えれば、志向性という意識の特質に基づいて思想を展開している点に、ブレンターノらの哲学の共通点がある。西田はその認識論について「唯時間的に移行行く認識作用と之を超越する対象のみが考えられて居る」と論文の冒頭で不満を表明し、「有るものは何かに於てなければならぬ」(同)という理由で、意識は場所として、つまり客観がそこに「於てある」場所として理解されるべきだと主張する。西田の「場所」は、さまざまな視点から解釈や意義付けがなされているが、この概念はまず何よりも、志向性の理論に対するアンチテーゼとして提示されているのである。では、意識はなぜ志向的なものとしてではなく、場所として理解されなければならないのだろうか。志向的なものとして意識を捉えることの欠陥はどこにあり、意識を場所的なものとみなすことで、その欠陥がなぜ解消されるのだろうか。本稿では、このような問いを追究することで、西田はフッサールを誤解しているため、実際にはフッサールの主張する志向的なものとしての意識と、西田の言う場所的なものとしての意識が親近性の高いものとなっていることを示す。

一 内容と対象の関係

上に掲げた問題を論じるために、西田の以下の文章を手がかりとしたい。

今日の認識論者は内容と対象とを区別し、内容は内在的であるが対象は超越的と考える。対象は全然作用を超越して、それ自身によって立つものと考えられる。此に於て我々は意識の野の外に出るのである。対象には意識

の野という如きものはないと考えられる。併し意識と対象と関係するには、両者を内に包むものがなければならぬ。両者の関係する場所という如きものがなければならぬ、両者を関係せしめるものは何であろうか。対象は意識作用を超越するというも、対象が全然意識の外にあるものならば、意識の内にある我々よりして、我々の意識内容が対象を指示するという如きことを考えることもできない、対象が意識作用を超越すると云うことすらできない(三・四一七)。

ここでは、志向性の理論についての西田の理解が示されていると同時に、場所の哲学の立場からの批判も行われている。すなわち、西田の理解によれば、志向性の理論では内在的な内容と超越的な対象とが区別されており、内在的な意識内容が超越的な対象を指示するというかたちで、内容と対象が関係づけられていると説明されている。それに対して、我々が意識の内に入り、対象が全く意識の外にあるのなら、意識内容が対象を指示することを考えることすらできないと西田は批判している。ここで表明されているのは、超越的とされる対象も、意識に内在しなければならぬということである。さらに、「唯時間的に移行行く認識作用と之を超越する対象との対立のみが考えられて居る」(三・四一五)という記述から、超越の対象として、西田は超時間的な対象のことを考えていることが読み取れる。志向性の理論では、内在的な意識内容が超時間的な超越の対象を指示すると主張されている、と西田は考えているのである。それに対して西田は、超時間的な対象もまた意識に内在すると反論し、そのことを「場所」という概念をもって説明しようとしていると言える。しかし、西田はブレンターノらの思想を正確には理解していない。そこでまず、内容と対象との関係が志向性の理論においてどのように考えられているか、ということを確認したい。

二 ブレンターノにおける作用・内容・対象

フッサールが意識の特徴とみなした志向性という概念は、ブレンターノが『経験的立場からの心理学』で、物的現象と区別される心的現象の特徴として、志向的内在という概念を用いたことに由来する。心的現象とは、「感覚か想像によるあらゆる表象」のことであるとブレンターノは言う。ただしここでの表象とは表象されたものではなく、表象する作用のことを指す、とされている。そのため表象された音や色は心的現象ではない。音を聞くこと、色のついた対象を見ること、暖かさや冷たさを感じること、同様の想像状態がブレンターノの言う心的現象である。それに対する物的現象の例として、私が見ている色や形、私が聞いている和音、私を感じている暖かさや冷たさの他に、想像のうちで現出する同様の心像 (Gebilde) などが挙げられている。

この心的現象と物的現象との差異を明確にするために、ブレンターノは心的現象をさまざまに特徴づけている。そのうち最も知られているのが、以下の引用で述べられているように、志向的内在を心的現象の特性として指摘した点である。

あらゆる心的現象は、中世のスコラ学者が対象の志向的（またおそらく心的）内在と呼んだもの、また我々が、完全に二義性を免れてはいない表現ではあるが、内容への関係、客観（この言葉をここでは實在のことと理解してはならない）への方向、あるいは内在的な対象性と呼ぶものによって特徴付けられる。あらゆる心的現象は、すべてが同じ仕方ではないにせよ、自己のうちに客観として何かを含む。表象においては何か表象され、判断においては何か承認されるか排斥されるかであり、愛においては愛され、嫌悪においては嫌悪され、欲望にお

いては欲望される(3)。

たとえば我々が表象し判断するときは必ず何かを表象し判断しているのであって、単に表象している、単に判断しているということはない。また我々は単に聞くのではなく音を聞くのであり、単に見ているのではなく色のついた対象などを見ている。その一方で、音や色といった物的現象にこのような特徴は見られない。この点にブレンターノは心的現象の特性を見出し、それを「心的現象は自己のうちに客観として何かを含む」と言い表した。表象することや判断することの対象、また見ることや聞くことの対象は心的現象に内在していると考えられているのである。さらにブレンターノは上の引用で、対象の内在性だけでなく、「内容への関係」や「客観への方向」といったかたちで内容や客観への関係性あるいは方向性についても述べている。この関係づけられていること、方向をもつという性格が志向的と言い表される。心的現象は対象、内容、客観と呼ばれるものへ向かい、それらを自己のうちにもつ。それが志向的内在ということであって、この点を捉えて、心的現象の特徴が志向的内在にあるとブレンターノは主張するのである。

だが、志向的内在という概念を説明する際に用いた「対象」、「内容」、「客観」という用語や、それらがもつ内在性と関係性についてブレンターノは詳しく説明していない。このあいまいさを解決するため、志向的内在という考えを受け継いだトワルドウスキは、内容と対象という二つの概念を区別し、作用としての心的現象は内在する内容を通して超越的な対象と関係すると考えるに至る。

三 トワルドウスキにおける作用・内容・対象

トワルドウスキはその著作『表象の内容と対象』の冒頭で、それぞれの心的現象の作用と内容との混同を防ぐことができるという理由で、ブレンターノの志向的内在に由来する見解に一定の評価を与えている。ただし内容という概念についてはまだ二義性が残っているため、内容と対象という二つの概念を明確に区別して用いることで、この二つの意味の混同を避けるべきだとトワルドウスキは主張する。

トワルドウスキは心的現象のうちで表象を取り上げ、この区別について考察をすすめている。それによれば、表象内容とは、表象されたものを意味するが、その表象されたものという言葉に二義性がある。例えば景色が絵として描かれたとき、「描かれた景色」という言葉が意味するのは、実際に存在する景色でもありえるが、景色が描かれた絵でもありえる。同じく「表象された馬」と言うとき、その言葉で現に存在している馬そのものを指すことが可能であると同時に、心の内に表象として現れた馬を指すこともできる。トワルドウスキはこの二義性を回避するために、景色を描いた絵に相当する心の内の馬を表象の内容と呼び、実際に存在する景色に相当する現に存在する馬を表象の対象と呼ぶのである。

また、表象内容と表象対象の関係についても、同じ画家の例に基づいて説明されている。画家は景色を模写し絵を描くことによって景色を表現するのであり、絵は画家にとって、景色を表現する手段となっている。同様に、表象の内容は表象の対象を表象するための手段となっており、我々は表象の内容としての馬を表象することによって、表象の対象としての馬を表象する。外界に存在する表象の対象は、心の内にある表象の内容を介して表象されると考えられるのである。そのためトワルドウスキは、表象内容と表象対象という二つの概念をこのように定義する。「内容に

ついで言えば、内容とは表象のうちで考えられ、表象される。対象について言えば、対象は表象内容（あるいは表象）を通して表象される。表象のうちで表象されるのが表象の内容であり、表象を通して表象されるのが、表象の対象である⁽⁴⁾。

こうしてトワルドウスキは、ブレンターノの主張がもっていた二義性を、内容と対象とを区別することで解消した。心的現象のうちに内在しているのは、トワルドウスキの用語で言えば内容であつて対象ではない。「客観への方向」としてブレンターノが語った関係性は、内容ではなく超越的な対象への方向として理解されている。我々は表象の内容を通して、特定された表象の対象へと関係をもつのである。さらに、詳しくは説明されていないものの、内容にあたるものをトワルドウスキは意味であると主張している。また対象は外界に存在する事物だけでなく、斜角正方形のように存在しないもの、他に殺害や正弦といった事物でないものも対象であると述べている。トワルドウスキによれば、我々は内在的な意味を通して、それらの超越的な対象に関係するのである。

四 フツサルにおける作用・内容・対象

フツサルの場合でも、トワルドウスキと同様に作用、内容、対象の三つが区別されており、しかも作用は内容である意味を通して対象へと向かうと考えられている。しかし、フツサルの区別はブレンターノやトワルドウスキとは多くの点で異なっている。まず作用に関して言えば、ブレンターノは色を見ることといった心的現象を、作用と同一視していた。またトワルドウスキは表象であれば表象する働きが作用であると述べていた。これらに対してフツサルは『論理学研究』では、作用を志向的体験と呼ぶ。

志向的という言葉は、「志向という特性、つまり表象という仕方で、あるいは何らかの類似した仕方で対象的なものに関係すること」(Hua XIX/1, S.392)⁽⁶⁾を意味する。そのため志向的体験という言葉は、その志向という特性、つまり志向性を備えた体験を意味することになるが、体験という言葉は通常と違った意味で用いられている。たとえば戦争を体験したという時、通常は、ここで「体験した」のは戦争という外的な出来事の複合だと言われる。だが体験する意識は、このような外的な出来事を心的な体験として自己のうちにもっているわけではない。体験のうちに存在しているのは、戦争という外的な出来事ではなく、その戦争を知覚する作用や判断する作用、この作用に付随する感覚質料などである。そこでフッサールは、外的な出来事を体験すると通常言われるとき、体験されているのは外的な出来事の複合としての戦争ではなくこの知覚する作用や判断する作用などであり、外的な出来事は体験されるのではなく知覚されたり判断されたりするのだと考える。これらの体験されたものが、つまり戦争のような外的出来事から区別されたさまざまな作用やこの作用に付随する感覚質料などが、フッサールにおいては体験と呼ばれる。志向的体験とは、このような意味での体験のうち、志向という特性を備えたものを意味する。ここで例となった戦争の体験は、体験とは区別される戦争という対象に向かっているため、志向という性質を備えた志向的体験であり、このような志向的体験が作用であるとフッサールは考える。さらにこの志向的体験が、意識についての三種の理解のうちの一つであると述べている。

ここで作用と呼ばれる志向的体験としての意識が内容をもつと考えられる。この内容という概念については、実的な内容と志向的な内容という二つの概念に区別されている。実的な内容とは「具体的か抽象的かに関わらず、作用の諸部分の全体」(Hua XIX/1, S.411)であって、時間の流れのなかで生成消滅するものであり、意識に真に内在的な内容とされる。この実的な内容には作用のほか、感覚、想像などの作用を構成しつつ、その作用の部分となつてはい

るが、志向されていない内容が含まれる。フッサールはこのように言う。

いわゆる内在的内容がむしろ単に志向的（志向された）内容であるなら、他方で、志向的体験の実的な要素に属する真に内在的な内容は、志向的ではない。その内容は作用を形成し、必要な拠点として志向を可能にするが、その内容はそれ自身は志向されておらず、作用のうちで表象される対象ではない。私が見るのは色の感覚ではなく色のついた事物であり、私が聞くのは音の感覚ではなく歌手の歌である（Hua XIX/1, S.387）。

この引用で「志向的体験の実的な要素に属する真に内在的な内容」と言われているのが実的な内容と呼ばれるものであり、その例として色の感覚、音の感覚が挙げられている。見ると言う作用は色の感覚を内容として持っているのだが、それが向かっているのはその感覚ではなく色のついた事物であるため、色の感覚を志向された内容と言うことはできない。そのためフッサールは感覚を実的内容として、志向された内容すなわち志向的内容と区別するのである。

志向的内容という概念は、作用の志向的質料、作用の志向的本質、志向の対象という三つに区分して説明されている。第一の志向的質料は作用質料とも呼ばれ、たとえば火星に知的生命体があると表象しているのであれば、「火星に知的生命体がいる」というのが作用質料となる。これに対して、表象や判断といった対象への関わり方が志向的性質あるいは作用性質と名付けられている。そのため先の火星に知的生命体がいると表象するという例であれば、表象が作用性質であり、 $2 \times 2 \parallel 4$ と判断しているのであれば、「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」が作用質料となり、判断が作用性質となる。あらゆる作用は、この作用質料と作用性質とを備えており、この両者がなければ志向性をもった作用が成立しないため、フッサールはこの両者をまとめて志向的本質と呼ぶ。これが志向的内容の二つ目の意味に相当する。

ここで重要なのは、作用質料の役割である。フッサールはこう言う。「我々は質料を、作用のうちにあつて作用に始めて対象的なものへの関係を与えるものとみなす」(Hua XIX/1, S.429)。作用は質料によって、対象へと関係することが可能になるとされているのである。さらにこうも言われている。

質料とは：作用の現象学的内容のうちにある作用の特性であり、その特性は、作用がそのつどの対象性を統握するのを規定するだけでなく、作用がどのようなものとしてその対象性を統握するかを規定する。…作用の質料によって、対象は作用にとつて他でもないこの対象として妥当するのであり、質料はいわば性質を基づける（だが性質の相違とは関係のない）対象的な統握の意味（あるいは端的に統握意味）である (Hua XIX/1, S.429f)。

ここでは、作用質料こそが意味であると言われている。この意味によって我々は感覚を何かとして把握するのであり、意味によつて作用が向かう先が決定され、その対象が特定されるのである。「火星に知的生命体がいる」というように判断した場合、この判断は「火星に知的生命体がいる」という命題の意味によつて、「 $2 \times 2 \parallel 4$ 」などではなく「火星に知的生命体がいる」という事態へと向かう。このような意味としての作用質料によつて、作用はじめて対象へと関係することができるとフッサールは主張しているのである。

その作用が向かう先が、志向の対象と呼ばれるものである。志向の対象とは、たとえば我々が家を表象しているのであれば、その家のことを指す。数字の五のような理念的なものであつても、それを表象しているのであればその数字の五が志向の対象であり、ペガサスのような想像上の存在を表象しているときでも、円い四角形のような存在し得ないものを表象している場合でも、その表象が向かう先のペガサスや円い四角形が志向の対象である。そのため、空

間的に自己の外部にあり、そのため意識を超越していると考えられる事物であつても、永遠不変であるため時間の流れのなかで変転する意識に対して超越しているとみなされる理念的な存在であつても、この志向的对象と別のものではない。

表象の志向的对象は、表象の現実的な対象と同じであり、場合によつては表象の外的な対象と同じであつて、この両者を区別することは矛盾である。：私が神や天使、睿智的存在そのものを表象しようと、物理的な事物や丸い四角形を表象しようと、ここで挙げられたもの、超越的なものはまさに思念されているのであり、そのため（単に他の言葉で言つただけだが）志向的客観なのである（Hua XIX/1, S.439）。

もちろんなにか別のもの、たとえば火星人を表象しているのであれば、火星人がその表象の志向的对象であつて、神や天使は志向的对象ではない。だが神を表象しているとき、志向された対象としての神と、神という超越的な存在とは同一のものであつて区別できない。我々が超越的对象について語るときはすでに思念されている以上、それは志向的对象なのである。

志向的对象はまた、単なる感覚質料ではない。感覚質料は実的内容に属するもので、志向的对象ではない。この違いを説明するために持ち出されているのが射影という概念で、たとえばたとえば目の前にある本を見ると、我々はその本の前面しか見ておらず、後ろや横の側面を見てはいない。横の側面を見ると今度は前面が見えなくなる。そのように事物は常に、その一面しか与えられない。こうして本のさまざまな側面を見ると、与えられる感覚はそのつど異なつたものとなるが、我々はその本を同一のものとみなしている。このようなことが可能になるのは、与えられ

た感覚素材に基づいて、それが何らかの同一の意味をもつたものとして捉えられるからである。このようになんらかのものが単なる感覚ではなく対象として捉えられるのは、意味によってその感覚素材がまとめ上げられることによるため、意味がなければ志向の対象への関係は成立しないのである。

以上のようにフッサールは、我々は内容としての意味を通して対象と関係するのであり、対象との関係は内容としての意味によって成立すると主張している。この点でフッサールはトワルドウスキと共通する。しかしフッサールは、内在的内容である意味を通して関係する対象を、トワルドウスキのように単に超越的な対象として規定しているわけではない。すでに述べたように、超越的な対象も志向的な対象であって、この志向の対象は実的には内在しないものの、志向的には内在するものとみなしている。フッサールは、作用に実的に内在する感覚質料をもとに志向的に内在する意味が構成され、その意味を通して志向的に内在する志向の対象への関係が成立する、と主張しているのである。

さて、第一章の冒頭では、「内容と対象とを区別し、内容は内在的であるが対象は超越的と考える」と考える認識論者に対する西田の批判を引用した。これまで述べてきたように、ブレンターノは超越的な対象について言及していない。上の西田の理解は、トワルドウスキの考えに近い。ただし、トワルドウスキにとっては外界に存在する馬も超越の対象であって、必ずしも超越の対象という言葉で超時間的なものを意味しているわけではない。フッサールはブレンターノともトワルドウスキとも異なり、実的内容は実的に内在するが、志向的内容は実的には内在しない、志向的内容は志向的に内在するのであり、志向の対象も実的には超越だが志向的には内在している、と考えている。フッサールは、単純に内容が内在的で対象が超越的と考えているわけではないのである。さらにフッサールの場合、超越的な対象も超時間的な対象も、それが考えられたときには、志向的に内在する志向の対象であると主張されている。そのため西田は志向性の理論を誤解してしまっており、その批判に妥当性があるとは言えない。ここで注目したいの

は、西田自身の理解に反して、意識を場所とみなす西田の思想にはフッサールとの類似性が見出せる、という点である。この点を次の章で明らかにしたい。

五 西田における作用・内容・対象

五・一 『自覚に於ける直観と反省』での作用・内容・対象

内在的内容と超越的对象とを区別する思想に対して、西田は超越的对象も内在するという考えを提示しているのだが、この考えは論文「場所」ではじめて現れるわけではない。

まず、『自覚に於ける直観と反省』での問題意識を生んだ高橋里美の批判で、すでに超越と内在との関係が問題となっている。『善の研究』に対して批判を行った高橋里美は、意味とは事実が指示するものであり、事実を超越していると主張する。それに対し西田は、「事実が意味を有つというのは、事実が全く自身の内容と異なつた天外の或物を指示するということではなくして、直接経験の事実自身の中に意味を具して居ることではなからうか」(一・二四九)と述べる。意味は純粹経験の事実を超越しておらず、純粹経験の事実内に在すると反論しているのである。西田はこうも述べている。

余は氏の云われる意味と事実とは意識の両面であるという如き考に、全然反対するのではないが、唯如何にして一つ意識が此両面を具して居るか、此両面は如何にして一つの意識に結合せられて居るか、意識の如何なる方

面が意味であつて如何なる方面が事実であるかを考えて見ねばならぬと思う（一・二五二）。

ここでは、意味と事実の相違を認めつつも、二つとも意識がもつ側面であると考えられている。言い換えると、どちらも意識に内在するという見解が示されている。

西田はここで、意味は超越であると言う高橋里美に対して、意識に意味は内在すると主張していると言える（7）。意味は内在であるという点だけ見れば、ここでの西田の思想はトウルドウスキやフッサールと共通していると言えるであろう。しかし、西田はこの二人に異論を唱えている。『自覚に於ける直観と反省』では、「ボルツァーノ以来フッサールに至るまで内容と対象との間に絶対的区別を主張して居るのであるが、余は寧ろナトルプなどと同じくこの区別は相対的に過ぎぬと考へたい」（二・一二二）と言われた上で、等辺三角形と等角三角形は内容としては異なるが対象としては同一であるというトウルドウスキの見解を引き合いに出して、こう述べられている。

意識を超越する対象というのも、要するに意識内容それ自身の内面的統一ということの意味して居るのではなからうか。対象に対して内容というのは単に一つの対象の種々なる限定の仕方を意味して居るのではなからうか。内容と対象との差は単に統一の相対的差異に過ぎないと思ふことができる。例えば等辺三角形とか等角三角形とかいう意識内容は、その統一たる対象に対しては内容というべきであらうが、更に特殊なる意識内容から見れば此等のものも逆にその対象と見做すこともできるであらう（二・一二二）。

この二つの引用で表明されているのは、内容と対象との違いは相対的差異にすぎないこと、つまり異なる立場から見

れば同じものが内容とも対象ともみなされうることである。トワルドウスキやフツサールの主張に従つても、内容が対象となる場合はある、と言えるであらう。例えば馬を表象するとき、外界に存在する馬が表象の対象であつて、心の内に表象として現れた馬が表象の内容となる。我々はさらにこの表象の内容としての馬を表象することができる。このとき、この表象の内容としての馬が表象の対象となる。西田が例にとつてゐる等辺三角形や等角三角形についても、やはりそれらは表象されることで、表象の対象となると考えられる。だが、対象もまた立場によつては内容となりえるという考えは、『自覚に於ける直観と反省』の結論部には現れていない。

同書の最後に置かれている「跋」では、作用は一つの世界を構成する作用として理解され、様々な立場からの構成作用によつて様々な世界が構成されると述べられている。たとえば芸術家の立場からは芸術家の世界が、歴史家の立場からは歴史の世界が構成されるのである。そして、「未だ何等の立場という如きものを取らざる以前の世界、或はすべての立場という如きものを除去した世界、即ち真の与えられたる直接経験の世界」（二・二六四）が、「絶対自由意志の世界」（同）と呼ばれる。絶対自由意志の世界とは、世界を構成するさまざまな作用を統一し、それぞれの作用を対象として、それを自由に選択することによつて、どの世界も自由に構成できる絶対自由意志の立場で現れる世界のことを言う。ここでは、作用が一つの世界を構成するということかたちで、作用と世界とが切り離すことのできない二つの側面であること、絶対自由意志の立場ではその世界を構成する作用が対象となるということが語られてはいるが、超越的な対象と内在的な内容との区別をめぐる問題については議論が展開されていないのである。『自覚に於ける直観と反省』では、対象も立場によつては内容となりえるという考えが提示されるにとどまつてゐると言える。この考えに基づいて、初めて思索が展開されるのは、『働くものから見るものへ』においてである。

五・二 『働くものから見るものへ』での作用・内容・対象

『働くものから見るものへ』では、まず「内部知覚について」で作用、内容、対象の関係について述べられている。次の文である。

対象を指示するということも、作用が対象を外に見るのではなく、自己自身の内に見るのである。対象とは、自己自身の内に映されたる作用の影に過ぎない。対象を作用の外に見ると考えるのは、心理的作用を考えるが故である（三・三五五）。

ここでは、心理的作用に対しては対象が超越となるということを認めつつも、対象は外ではなく内に見られること、つまり対象は超越ではなく内在であるということが明確に語られている。このような考えと間違いなく関連しているのは、「知るものは、すべてを自己の内に於て知るのである」（三・三五四）という理解である。『自覚に於ける直観と反省』では、物を鏡に映すことが知ることであるという模写説を否定して、「物を知ることとは与えられた経験内容を統一することである」（二・二六二）であるという構成主義的な立場に立っている。この場合、知る主観の外部に与えられるものの存在が想定されることになるため、対象もまた内在であるという考えとは両立しない。これに対して、論文「内部知覚について」で知るものが自己の内に於て知ると言われるとき、主観は自己の内にあるものを知るのであり、知られるものは主観の内にある、と考えられている。

また、『自覚に於ける直観と反省』では、単に対象も立場によつては内容となりえると述べられていただけだった

が、「内部知覚について」では、対象を超越とするのは心理的作用の立場である、と主張されている。これに対する、対象を内在とする立場、あるいは対象を内在とする意識は、心理的作用としての意識ではなく、意識する意識、あるいは超越的述語面と呼ばれる意識である。この二種類の意識の区別がよく読みとれるのが、「知るもの」にある次の一節である。

意識現象は志向的とか意味を荷うとか考えられるのであるが、私は単に志向的作用と考えることによって尚意識の本質を明にすることはできないと考える。意味を荷う作用という如きものは、尚知られたもので知るものではない、意識せられたもので意識するものではない。意識はかかる作用をも内に映すものでなければならぬ。(三・五三九)。

西田がここで言う志向的作用とは、内在的な内容によつて超越的な対象へと関係する作用であつて、「内部知覚について」での心理的作用に相当する。それは知られたもの、意識されたものにすぎないところでは言われている。これに対して、この作用を内に映す意識するものの存在がみとめられている。西田は前者を意識された意識、後者を意識する意識と呼び、さらに後者が、特に西田が特別な意味を込めて用いる「場所」がもつ性質を備えたものとして捉えられたとき、超越的述語面と言ひ表される。

西田の言う場所とは、まずもつて「有るものは何かに於てなければならぬ」(三・四一五)と言われるときの「何か」のことを指す。つまりあらゆるものは場所に於いてなければならぬのであつて、それが場所論の根本的主張である。この主張には、少なくとも二つの事柄が含意されている。一つ目は、場所に於いてあるものは場所の内にあるという

内在性であり、二つ目は、場所に於いてあるものは場所によつてはじめて成立するという意味での可能性である。つまり、場所に於いてあるものは、場所に内在しており、場所によつて可能となつてゐることになる。

また、西田はこの場所とそこに於てあるものとの關係を、包摂判断から考える。包摂判断とは、述語が主語を、一般が特殊を包むものとなつてゐる判断を言う。たとえば家は建物だという判断では、主語である家は、述語である建物よりも狭い概念となつており、建物という一般に対する特殊という性格をもつ。この包摂判断での主語と述語の關係を、西田は場所に於いてあるものと場所との關係として捉え、於いてあるものを主語面、場所を述語面とも言い表す。家は建物だと判断するとき、家が建物という場所にあると判断したことになるのである。さらに、判断は單について主語に述語するということではない。「一般なるものの方から云えば、包摂することは自己自身を分化發展することである。判断とは一般なる者が自己自身を特殊化する過程と考えることができる」(三・四三一)と述べられてゐるように、包摂判断は述語で表される一般者が自己自身を特殊化し限定することであり立つとされてゐる。そのことから、一般者と同一視された場所も、自己限定するものと考えられてゐる。この主語と述語、特殊と一般という關係から見ると、家や建物といったさまざまな概念は、ある時は判断の主語となりある時は述語となるものであるのに対し、意識は述語となつて主語とならないものとされ、超越的述語面と呼ばれる。

この超越的述語面という規定によつて、この意識がもつさまざまな性質が言い表されてゐる。まず、超越的述語面としての意識が判断の主語にならないということは、「於いてあるもの」には決してならないということであり、その意識は客観とならないということを意味してゐる。これは逆からみれば、あらゆるものが超越的述語面としての意識という場所に於いてあり、あらゆるものがそこに内在しその客観となるということも意味してゐる。さらに、あらゆるものが超越的述語面としての意識に内在するということは、あらゆるものがそれによつてその存在が可能になつ

ているのであり、それを超越するものの存在を認めない、ということになる。意識された意識としての心理的作用に對しては超越する対象も、この超越的述語面には内在しているのである。

超越的述語面としての意識は、もう一つ、超時間的という性質をもつ。心理的作用については、「時間上に生滅する意識作用が意識するのではない」(三・四三三)とあるように、時間的に生成消滅するものとみなされている。しかしながら、生成消滅することのない意識について、西田は「表現作用」という論文で以下のように説明している。

時に於て物が変ずるとしても、尚その物が「於てある場所」というものが考えられねばならぬ。直線的なる時にしても、前の瞬間が去つて次の瞬間に移るには、その前後を含んで止まる或物がなければなるまい。動き行く現在の背後に、何処までも止まれる現在がなければならぬ。時が時々刻々に移り行くものとするならば、その結果を維持するものがなければならぬ。之によつてその結果が統一せられ、一次元的なる時として対象化せられるのである。単に一瞬から次の瞬間に移る生産的作用のみにては、その結果を統一することはできない、作用が作用を見るには作用を離れた立場がなければならぬ(三・三七九)。

この引用では、時間の中で変化するものに対して止まるもの、移り行くものに対してその結果を維持するもの、あるいは結果の統一を可能にするものが「場所」であると語られている。さまざまな角度からある箱が見られた場合、感覺された内容は異なつても同一の箱として把握される、という例で言えば、それぞれの角度からの一瞬一瞬の視覚作用のみでは、その箱を同一の箱とみなすという働きは生じない。それが同一の箱とみなされるためには、まずもつて一瞬一瞬に異なる感覺内容が過去のものとして消滅することなく、過去のものでありながらその内容が維持されな

ければならない。その上ではじめて、維持された内容が統一されて、同一の箱と見なされることが可能となる。しかし時間的に生成消滅する作用は、まさに時間的に生成消滅するがために、過去の感覚内容を維持することはできない。そこで西田は、何らかの対象を同一のものとして見るといった事実を説明するためには、時間的に生成消滅する作用とは別に、つまり意識された意識とは別に、過去の感覚内容を維持するものとして、超時間的な意識がなければならぬと主張するのである。これが超越的述語面としての意識であり、これにのみ、超時間的なもの、つまり超越的对象が内在するのである。

こうして、超越的述語面としての意識は、心理的作用である意識された意識と異なり、超越的对象が内在すること、客観とはならないこと、超時間的であることという少なくとも三つの性質から特徴づけられる。ここでは、『自覚に於ける直観と反省』で表明されていた、異なる立場から見れば同じものが内容とも対象ともみなされうるという事態が、より具体的かつ構造的に理解されていると言える。すなわち、意識された意識の立場からは超時間的で超越的な対象であるものが、超越的述語面である意識する意識の立場からは、内在的なものとみなされている。意識とはこのような構造をもったものとして理解されるべきで、内在的な内容と超越的な対象とを区別し、「唯時間的に移行行く認識作用と之を超越する対象との対立のみが考えられて居る」とみなすべきではない、と西田は主張するのである。

結

西田は作用、内容、対象の関係を「内容と対象とを区別し、内容は内在的であるが対象は超越的」とし、しかも超越的な対象を超時間的な対象のこととする理論に反論しているのだが、第二章から第四章までで、それがブレンター

ノ、トワルドウスキ、フツサールのいずれの理論とも異なっていることを示した。第五章では、西田が『自覚に於ける直観と反省』でトワルドウスキとフツサールを名指して批判をし、自己の思索を展開していった結果、意識された意識の立場からは超時間的で超越的な対象であるものが、超越的述語面である意識する意識の立場からは内在的である、という考えにたどりついたことを明らかにした。

西田のこのあらゆるものは超越的述語面としての意識に内在するという自らの理解は、通常は意識外にあるため超越的とみなされる対象も、志向的对象として志向的に内在すると主張するフツサールの思想と重なるものであると言える。

西田が読んだ『論理学研究』と『イデーナー』では志向的内在という概念が明確には提示されていない。このことから、西田はおそらくフツサールが志向的内在という考えをもっていたことに気づいていなかったと言える。そのためか、西田は誤ったフツサール理解にもとづいてフツサール批判を行い、結果として、西田自身の意図に反して、場所としての意識という西田の思想は、志向性を意識の特質とするフツサールの思想と大きく重なり合うものとなったのである。

注

純粹経験に内在している、と西田は主張しているものと考えられる。

(1) 西田幾多郎からの引用は、『西田幾多郎全集』(岩波書店、二〇〇二・二〇〇九年)から、巻号と頁数を記して行う。ただし、旧漢字・仮名遣いは現代のものに改めた。

(2) Franz Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkt*. Erster Band, Hamburg, Felix Meiner. 1924, S.111.

(3) Ibid., S.124f.

(4) Twardowski, *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen*, Philosophia Verlag, Wien. 1894. S.18.

(6) フッサールからの引用は、*Husserliana* から、Hua の略号のあとに巻号と頁数を記して行う

(7) 『善の研究』では、「厳密なる統一の状態にある」(一・十四) 純粹経験に対し、「この統一が破れた時、即ち他との関係に入った時、意味を生じ判断を生ずる」(同) と言われる一方で、「併しこの統一、不統一ということも、よく考えて見ると畢竟程度の差である、全然統一せる意識もなければ、全然不統一なる意識もなからう」(同) と述べられている。意味は厳密な統一状態としての純粹経験ではないが、広義の